

東名鍛工



鍛造の熱にも負けない！
情熱を語る宮嶋俊介社長



1200℃の熱で鉄を赤くし、アブセッターという鉄の先端を掴む機械で加圧し直径を大きくする。これが東名鍛工の強みである「アブセット鍛造」だ。実際にアブセッターを使う鍛造を見させていただいたが、熱した鉄が間近に来ると放射熱を感じた上、鍛造職人が力加減を調整しながらアブセッターで鉄をプレスしシャフト（車など動力を伝える回転軸）を製造している現場も知ることができた。このシャフトはトヨタのSUVに使われているとのこと。鍛造の現場を見る機会は貴重だが、ここで製造されているシャフトが人々の毎日の足を支えていることに気づけるのも貴重な機会だろう。

また、工場のデザインも非常に凝っている。社長や社員自らがデザインしたキャラクターや作品があらゆる箇所に隠れている。特に東名鍛工のアブセッターマンの色には「鋼の黒・誠実の青・情熱のレッド」という思いが隠れている。さらに、工場の玄関となる入口は、社員の安全を気遣いつつ地域の人々にも工場に目を向けてもらえるよう、虹（スローガン）と雲（可動設備）をイメージした作りをしていた。



▲「鋼の黒・誠実の青・情熱のレッド」のアブセッターマン

東名鍛工は1967年創業。アブセット鍛造でシャフトを製造する会社だ。アブセット鍛造を専門とする会社は少なく、鍛造を行うためのアブセッターを保有する会社も少ない。そんな数少ない会社の中でも、東名鍛工は複雑で細かい加工を加えられる鍛造技術を持っており、クボタやトヨタ、日産などが取引先となっている。

2015年に生まれ変わった東名鍛工。なぜ生まれ変わったのか。それは同じくアブセット鍛造を専門とする滋賀県の株式会社ミヤジマが倒産寸前の東名鍛工を事業継承したからだ。ミヤジマが引き継ぐまで、東名鍛工の機械は毎日どこかで壊れ、工場内はヘド口などで汚れまくり、社員の給料も見合っていない。「いつ倒産してもおかしくなかった」と宮嶋社長は話す。

しかし、東名鍛工の技術だけはミヤジマにない付加価値をつけられるものだったため「残さなきゃあかん」と、ミヤジマが東名鍛工をグループ会社にし立て直した。

「負けん気だけはあった。それが人生そのものが、人それぞれなのは、東名鍛工の宮嶋俊介社長だ。」

倒産寸前だった東名鍛工の立て直しを社長として導いた。OS活動や作業服のお洒落化をはじめ、冥払拭の試みで、東名鍛工の成長ベクトルを右肩上がりに伸ばしてきた。

ファクハクでも自身のエンターテイメント精神と他に負けない情熱で「静岡市のアブセット鍛造会社」をアピールする。

東名鍛工株式会社

〒424-0053静岡県静岡市清水区波川3-12-10
 狐ヶ崎駅徒歩約18分
 054-345-2495



1,200℃の情熱と現場。

